

新潟市議会代表团 韓国訪問 報告書

新潟市議会代表团

団長	議長	皆川	英二
団員	議員	林	龍太郎
〃	議員	小林	弘樹
〃	議員	西脇	厚
〃	議員	松下	和子
〃	議員	内山	幸紀
〃	議員	高橋	聡子
〃	議員	小柳	聡
〃	議員	小林	裕史

訪問日程 令和5年(2023年)10月12日から10月16日まで

10月12日(木曜)	新潟駅～東京駅～成田空港
10月13日(金曜)	成田空港～仁川国際空港～清州市 清州市議会表敬訪問
10月14日(土曜)	会議出席及び市内視察 ・第13回清州工芸ビエンナーレ視察 ・韓中日国際フォーラム参加
10月15日(日曜)	市内視察 ・国立清州博物館視察 ・清州文化産業振興財団訪問 ・ユッコリ総合市場視察 ・国立現代美術館視察 ・第13回清州工芸ビエンナーレ閉幕式視察
10月16日(月曜)	清州市～仁川国際空港～成田空港～東京駅～新潟駅

訪問地 大韓民国 清州(チョンジュ)市

訪問目的 2015年の「東アジア文化都市」選定のつながりから「青少年交流」や「文化イベント交流」などを行っている韓国清州市を訪問し、これまでの交流に加え議会同士による交流を行うことで、相互理解を深めるとともに、信頼関係を構築し、国際交流の一層の促進を図る。

◎令和5年10月12日（木曜）

移動（新潟駅～東京駅～成田空港～ホテル）

◎令和5年10月13日（金曜）

移動（成田空港～仁川国際空港～清州市）

清州市議会表敬訪問

○清州市議会表敬訪問

【訪問先】 清州市議会（庁舎工事中のため臨時庁舎へ）

【面会者】 金炳國（キム・ビョングク） 清州市議会議長

金銀淑（キム・ウンスク） 清州市議会副議長

【同席者】 ソン・ミヌ 議会事務局長

ユン・ジョンクル 秘書室長

キム・ヨンスン 議政チーム長

【清州市の概要】

大韓民国・清州市は、ソウル市南東 128 km 高速バスで 1 時間 40 分のところに位置し、夏は高温多湿、冬は冷たく乾燥した風の吹く乾期と雨期がはっきりした都市である。人口は約 85 万人（2023 年 4 月）で、半導体、電子部品製造等のハイテク産業が盛んである。また市内に 8 大学、大小 150 余の図書館を有し、多くの学者・研究者たちを輩出しており、教育都市としても有名である。

2014 年 11 月「日中韓文化大臣会合」において本市、中国の青島（チンタオ）市と共に 2015 年の「東アジア文化都市」に正式決定したことを機に本市との交流が始まったものである。

国際芸術祭「清州工芸ビエンナーレ」を 1999 年から開催し、今回は日本人の作家が大賞を受賞した。また、同会場内で開催の「韓中日国際フォーラム」では、本市の文化のひとつでもある「にいがた総おどり祭」が 20 万人の熱狂する踊りの祭典として、新潟総踊り祭実行委員会の総合プロデューサーによって紹介された。

【会談概要】

会談は臨時庁舎において終始和やかな雰囲気の中で行われた（昨年からの庁舎改修のため清州市庁舎、議会棟が共に臨時庁舎となっている）。キム・ビョングク議長が我々の訪問に対して、感謝の意を述べ自ら清州市の概要並びに清州市議会の組織構成等を説明していただいた。清州市は人口約 86 万人の「基礎自治団体」（市）であるということ、組織としては議長、副議長、7つの常任委員会と2つの特別委員会に議会事務局があり、4つの係がある。事務局職員数は 70 名とのこと。

キム議長によるとユン・ソンニョル大統領は韓日関係を重視しており、冷静に状況を注視しているとのこと。キム議長の所見としては、福島原発の処理水については、日本政府は正常な処理をしていると認識している。中国が日本だけを厳しく追及する今の姿勢は違うと

思うと述べた。清州市においては以前、地方議員は兼業も可能であったが、現在、副業は不可となっており議員報酬は多いとは言えないと述べた。

続いてキム・ウンスク副議長が、2015年に本市を訪問した際、地酒をおみやげとして購入し持ち帰ったことを述べ、本市訪問での思い出を懐かしそうに語ってくれた。新潟は米どころであると承知をしているが、清州市も米が有名でチョンウォン生命米という、ブランド米の存在を教えてくれた（チョンウォン郡は2014年に清州市と合併した）韓国の議会では、議長になるために期数の制約はないが、やはり経験を重視しているのだという。

皆川英二議長が、キム議長、キム副議長の冒頭あいさつや発言を受けて、「本日はお時間をいただき感謝申し上げます。」と述べ、新潟市の議員定数は清州市の42名より多く、50名であることと新潟市では議員数がまだ多すぎるという意見もあることを紹介、この度は委員会のメンバーではなく、新潟市議会を代表しての訪問団であることを説明。また米や酒が美味しいのは新潟の水そのものがきれいで、それを使って造る米や酒は必然的に美味しいのですと解説した。

新潟駅がリニューアルの最中であることと、企業誘致や中心街の整備に力を入れていることを紹介し、新しくなる新潟市に是非訪れていただきたいとお誘いした。

その後、議長室から隣室の議場に移動し、記念品の交換や記念撮影が行われた。議場では早速、訪問団の団員より清州市議会のシステム等についての質問が多数なされ、こちらでも活発なやり取りとなった。因みに新庁舎の完成予定は2028年の予定だそうだ。

【所見】

キム・ビョングク議長、キム・ウンスク副議長、皆川英二議長そして8名の団員らによる会談は、冒頭で述べたように終始和やかな雰囲気の中で進んだ。時折冗談等も入り混じり笑顔での会談であった。議員定数や兼業、議員報酬等、両市において共通の問題を抱えていることを認識した。韓国の政権交代も大きな要因のひとつと思うが、日本に対する韓国側の見方も変化してきているのかもしれない。

キム議長から、もしも皆さんの予定が許すならば夕食を共にしませんかと打診を受けたわけであるが、残念ながら訪問団には次の予定が入っていたため辞退させていただいたが、キム議長のお気持ちがとても嬉しく感じられた。

2015年東アジア文化都市共同宣言にあるように、今こそ文化、芸術分野等において民間レベルによるより一層交流の活性化を図るべきと感じた。互いの知見や経験を共有、協力をして事業を推し進めることが大切である。

最後に、皆川議長が「新しい新潟市へ是非お越しいただきたい」と発言した際にキム議長が、担当者に向かって「新潟への訪問の計画は？」と問い、担当者が「はい、来年に向けて検討いたします」と答えた場面が印象的であった。



(写真) 会談の様子



(写真) キム議長、キム副議長と
新潟市議会代表団

◎令和5年10月14日（土曜）
会議出席及び市内視察

○第13回清州国際工芸ビエンナーレ

【訪問先】 清州工芸ビエンナーレ（文化製造廠本館3階本展示場）

【面会者】 卞光燮（ビョン・グァンソプ）清州市文化産業振興財団代表理事

【概要】

2023年で13回目の清州工芸ビエンナーレは現存する世界最古の金属活字本である「直指心体要節」を印刷した歴史的脈絡を継承・発展させ、世界中に韓国の工芸文化商品を広報することで、工芸産業のインフラ構築を図る目的で1999年からはじまった。

今年は9月1日から10月15日までの45日間で「物事の地理（The Geography of Objects）」をテーマに行われ、工芸家たちは人間の体と自然が結んでいる直接的な関係を瞬間瞬間で確認しながら作業する。工芸は人間と自然の間に数千年間続いた直接的で肉体的な交わりと相互進化の歴史であり、結果である。

2023年の清州工芸ビエンナーレは工芸が持つ、このような特別な能力と力、そして人間と自然の相互進化によって作られた様々な物事とその関係に注目をし、物事がどこから来て、どのような関係を作り、どこに向かっていくのか、「大きな歴史」と「大きな問い」の大局的な視点から、より高い次元の「物事（Objects）」の航海をはじめ、世界各地からの工芸・工芸作家を集約する。国際工芸公募展、招待作家・招待国展、工芸産業館、国際工芸ワークショップ・国際工芸商品、工芸家トークリレー、国際アートフェア、工芸サミット、子ども向け工芸遊び、工芸マーケット、IT機器活用した芸術旅行、市民向け解説、工芸体験等、豊富な内容で広い空間で盛大に開催され、工芸・人の力を直接感じることができる。

【所見】

現存する世界最古の金属活字本を印刷した歴史的脈絡を継承・発展させた地ゆえ、工芸にこだわり都市としての特色の示し方には目を見張るものがあり、そこに関わる人々の情熱ある思いには、おおいに刺激を受ける。国の違いや都市としての歴史の違いはあれ、世界各地の工芸、工芸作家に大きいチャンスにあたえている。工芸に国境は無いと感じる工芸展である。チャンスの与えかたも多岐にわたり制作資金や制作スペース、また、航空券等と様々な思考で用意されている。工芸に対する思い、地域を思う思い、地域の今後の将来向かう方向を考え、工芸文化の違いも一つのテーマを示すことで色々な違いを越え、文化、工芸のすばらしさや人に与える共通した感動を生み出している。今後、更なる交流をもって互いに未来につなぐ物にしなければならないと確認できる視察であった。



(写真) 展示会職員による説明



(写真) 展示会職員による説明

○清州韓中日国際フォーラム

【訪問先】 清州文化製造倉東部倉庫 38 棟

【面会者（フォーラム登壇者）】

卞光燮（ビョン・グァンソプ）清州市文化産業振興財団 代表理事

許紅煒（キョ・コウイ）青島市文化観光局 副巡視員

薛華龍（セツ・カリュウ）上海箏文化促進会 会長

岩上寛 いがた総おどり総合プロデューサー

【概要】

2015年、東アジア文化都市に選定された清州市（韓国）、青島市（中国）、新潟市（日本）の3都市の国際交流フォーラムが開催された。各国代表者による取り組み事例の発表の後、ディスカッションが行われた。

清州市のビョン代表理事からはかつてたばこ製造廠だった建物を、ショッピングモールを含む文化製造廠にリノベーションした事例。そして、そこで開催されている清州国際工芸ビエンナーレについての発表があった。

文化製造廠は、1946年から2004年までタバコ製造廠として使われていたが、閉鎖後は10年ほど放置されていた。マンション用地として企業に売ることができたが、清州市として、ここを市民の財産として捉え、リノベーションを進めることにした。そして、2021年、ショッピングモール、韓国工芸館、図書館などが入る複合施設として生まれ変わった。

また、清州国際工芸ビエンナーレは1999年から開催され、今年13回目を迎えた。前回からは文化製造廠がメイン会場として使われている。韓国、中国、日本、そして世界各国から工芸作品を募り、世界の文化都市を目指して取り組みを重ねている。

「世界は、開発の時代から文化の時代に入っている。古い建物に新しい価値を与えて再生するのが世界のトレンドである。世界が混沌しているいまだからこそ、東アジアが一つの文化都市になることに意義がある」とビョン代表理事。

青島市文化観光局の許氏は、都市のブランディングの重要性を語った。青島には様々なコンテンツの博物館があり、ビール博物館、工芸博物館ともに売上を増やしている。国内外を繋ぐ多くの空路もあり、コンベンションにも力を入れている。映画スタジオ、ロケなど撮影に相応しい島、大規模フェスを開催する音楽の島としても売り出している。

上海箬文化促進会の薛氏は、12年間に渡り、展示会、フェスティバル、全国的な箬文化の研究、10冊の出版などの活動を紹介した。その上で4つの提案があった。

1. 常に使える情報交流のプラットフォームの必要性。
2. 常設の交流チームの必要性。
3. 清州市に箬文化の博物館を。
4. 箬文化を世界的な文化遺産にすることである。

にいがた総おどりの岩上氏は、祭りのこれまでの経緯と次世代の子どもたちに伝えたい思いを語った。にいがた総おどりは2001年にはじまり、現在では日本最大級のオールジャンルダンスフェスティバルとして賑わいを見せている。来場者は約20万人、参加者数約1万5,000人と開催期間の3日間は、街が踊りの熱狂に包まれる。また、2005年からは新潟の歴史に埋もれていた樽砦、小足駄などの復活を通じて、文化資源の再構築を図っている。さらに年間を通じて、学校・教育支援、障がい者交流、地域コミュニティづくり、海外交流、高齢者の健康づくり、伝統文化の継承などを行なっている。

【所見】

3カ国の都市の特徴、それに携わる人の熱量が直接伝わってきて大変理解が深まった。工芸、箬文化、踊りなどは3カ国に共通する文化であり、こうしたテーマで民間交流を促進し、ともに何かを生み出す機会があればさらに理解が深まると感じた。国家間では様々な軋轢があるが、市民と市民が顔を合わせ、対話・交流する機会を重ねていくことは東アジアの平和の土台となると思う。



(写真) 皆川議長の挨拶



(写真) 日中韓参加の皆さんと一緒に

○清州韓中日国際フォーラム歓迎晩さん会

【面会者】 卞光燮（ビョン・グァンソプ）清州市文化産業振興財団 代表理事
青島市 文化観光局 許紅煒 副巡視員
上海 箸文化促進会 薛華龍 会長

【概要】

ビエンナーレの会場を後に、晩餐会では3カ国のフォーラム参加者皆で韓国の伝統的な献立料理の韓定食でもてなしていただいた。

ビョン・グァンソプ代表理事からは、「2015年に東アジア文化都市に選定され楽しい文化交流の時間であった。3カ国の交流の再開がいつになるか心待ちにしていた。清州市・青島市・新潟市の3都市・3カ国の交流をとでもうれしく思っている。東アジアの文化交流において春が来た。皆さんと話して美しい思い出を残していきたい。」と歓迎いただいた。

煒 副巡視員からは、「次回は皆さんを青島市でお迎えしたい。青島ビールを一緒に飲みましょう。」とお招きの挨拶を述べられました。

皆川議長からは、「いろいろな面できあいが出来た。昨日訪問した、清州市議会の議長からも清州市議会として来年から新潟市との交流を拡大していきたいと話があった。文化交流をさせていただいてこれからもっと広めていきたい。」と挨拶され、和やかに歓談させていただいた。

【所見】

久々となる3都市間での交流を心待ちにされ歓迎いただいたことは、喜ぶべきことであり、文化交流を通じて相互理解を深めるための様々な取り組みが行なわれてきた成果である。

もてなしていただいた食事からも韓国の生活文化を体験できたが、実に多くの文化が日本に根付いていることを感じた。文化交流は、政治や外交に影響されず市民レベルの交流によって続いていく。国際文化交流の重要性を改めて感じる機会であった。



(写真) 晩さん会で挨拶をする皆川議長

○文化製造廠

【訪問先】 文化製造廠（ムンファジェジョチャン）

【面会者】 卞光燮（ビョン・グァンソプ）清州市文化産業振興財団 代表理事
イ・ビョンス 清州市文化産業振興財団文化都市本部長

【概要】

文化製造廠（ムンファジェジョチャン）は、1946年から2004年まで清州の煙草製造廠だった。閉鎖から15年後の2021年に、文化中心都市再生事業により、商業施設・文化体験施設・工芸クラスターを整備した複合文化空間へと生まれ変わった。既存の建物の改修において、柱・壁・煙突の骨格を残しており、かつて煙草製造廠だったことがわかる。

文化製造廠では工芸都市・清州の名にふさわしく、工芸関係の展示が頻繁に開催されている。1階はグルメとショッピングモール、3～4階は韓国工芸館があり、だれでも無料で工芸展示を觀賞することができる。5階は図書館とキッズカフェがあり、家族連れに人気がある。コンサートホールでは随時多様な演劇や音楽会が行われ、清州市民が文化を享受するチャンスを拡大する場になっている。

【所見】

かつて韓国最大の煙草製造工場であった建物の歴史性を保ち、再開発ではなく保存・再生の方向で市民が利用できる現代的な新しい空間へと生まれ変わらせている。屋内外の空間すべてのデザイン性が高い。仕切りが少なく広々としている空間に様々な商業施設があり、若者はもちろん、あらゆる年齢層が訪れて利用するのに最適な場所となっている。このデザイン性の高さは多くの効果をもたらす重要な要素であると考えられる。

本市には、伝統・歴史・文化活動・食・自然など、世界に誇れるものが、たくさん存在する。しかし、これらを外へアピールする力の弱さが指摘されている。文化製造廠の成功事例は、本市の魅力発信の強化や、経済的・社会的・物理的・環境的に活性化させるうえで、おおいに参考となる事例であると考えられる。



(写真) イ本部長より説明



(写真) 文化製造廠本館の外観

◎令和5年10月15日（日曜）

清州文化産業振興財団訪問及び文化施設等視察

○国立清州博物館

【訪問先】 国立清州博物館

【面会者】 イ・ビョンス 清州市文化産業振興財団文化都市本部長

【概要】

韓国を代表する有名な建築家である金寿根氏が1979年に設計したもので、韓国の代表的な現代建築物に挙げられる、国立清州博物館を視察した。

博物館は、忠清北道における文化遺産を調査・研究・展示し、さまざまな文化教育プログラムを通じて「中原文化」の特徴を知らせることを目的に1987年に開館された。

常設展示場には忠清補北道で出土された先史時代から三国時代、統一新羅、高麗、朝鮮時代に至る2,300点の遺物が、時代別に4つの領域に分けて展示され、忠清北道の歴史と文化について理解を深めることができる。

金属工芸品としては、約17,000点の文化財を所蔵しており、韓国に3点しかない統一新羅時代の梵鐘の一つである清州雲泉洞銅鐘のほか、世界最古の金属活字本「直指」を印刷した興徳寺の金属工芸品など、先史時代から朝鮮時代までのさまざまな重要文化資産を所蔵している。

毎年開催されている、さまざまなテーマの特別展示をはじめ、子ども博物館学校や、伝統文化教室などの文化教育プログラム、春の文化祭など各種文化・芸術講公演などのイベントも催されている。

我々が入館した時には、起業家であるサムスングループの故李健熙会長が国に寄贈した、美術品や文化財の特別展も行なわれており、貴重な韓国の文化遺産に触れる機会となった。

【所見】

鉄器や青銅器、土器など日本でも見覚えがあることから、日本に根付いたさまざまな文化は海を渡り伝来されたものを吸収し独自文化へ発展させたものであることを改めて感じた。また、清州博物館では歴史を学ぶだけでなく、子ども展示室では韓国の昔の文化を体験し学ぶことができるようになっている。歴史の深い文化都市として、文化芸術の継承、創造に力を入れている事を感じた。

本市においても市民の文化芸術活動の支援、次世代への継承を進めるため、子どもや若者、クリエイターの育成・支援などに取り組んでいるが、本市らしい文化を国内外へ発信し、文化の創造の力を生かした交流人口の拡大、地域経済の活性化を目指していくのであれば、日本の伝統文化や地域に根付く文化を大切に継承、活性化に取り組むことが必要と感じた。

○清州文化産業振興財団

【訪問先】 清州先端文化産業団地内 会議室

【面会者】 卞光燮（ピョン・グァンソプ）清州市文化産業振興財団 代表理事
イ・ビョンス 清州市文化産業振興財団文化都市本部長

【事業概要】

21世紀の文化中心時代に教育・文化都市清州の特性を最大限に活かす為、「エデュテイメント（Education：教育＋Entertainment：娯楽）というコンセプトのコンテンツ産業を集中的に育成することを目的に2002年に発足。エデュテイメント産業関連の企業および研究所、支援機関、流通・消費施設などが集積している。文化産業振興基本法に伴い、文化観光部の承認を得て、全国初の文化産業団地に指定された事について。

【視察概要】

①清州先端文化産業団地内主要説明について

1階「映像館エデュピア」は、アニメーション専用の上映館になり、文化芸術イベントの為の使用貸し出や世界の有名アニメーション映画祭受賞作品・国内の超短編作品の上映を行っている。また、チュンブク・コンテンツコリアレップは、文化コンテンツ創作作家とスタートアップの育成支援を行っている。

2階チュンブク・グローバルゲーム開発センターは、忠北（チュンブク）（清州市を含む忠清北道（チュンチョンブクト））地域のゲーム産業の活性化及びグローバル市場対応企業の育成を目標にゲーム開発企業制作支援、マーケティング、商品化支援、専門人材の養成、入居施設の整備提供等の事業を展開している。

実績としては、2018年センター設立後から、毎年20余りのゲーム開発支援やゲーム開発企業の為の入居スペース21室を整備してきている。（韓国のゲームはオンラインゲームとPCやスマートフォン用のオンラインゲームが主流になっている。）

②清州先端文化産業団地内入居企業数について

企業・団体の主な業態は、デザイン・ソフトウェア開発・映像制作・コンテンツ開発・デジタル画像・印刷出版・コンサルティング・研究企画・教育サービス・広告・デザイン・コンピューターシステム・情報通信・放送通信サービス等を支援してきている。入居対象企業は、募集公告日基準で事業者登録1年以上の企業団体に限り、入居契約期間満了による空室が発生した場合、随時公告を通じ、入居企業を募集する。2023年度入居企業は、営利企業61事業者（従業員数421人）・非営利団体6事業者（従業員数14人）になり、入居可能床面積9,825㎡に対し、実入居床面積9,243㎡の入居率94%になる。

③財団2023年目標と長期的な目標について

財団2023年目標としては、面白い文化によって清州市民と通じ合う文化製造廠として、展示・公演・体験・マーケット（商品販売）など文化芸術産業の定着と流通に繋がる複合文化拠点化を目指し、文化への興味・関心と幸福度が高い、都市を実現する為の求心地点としての役割向上や文化製造廠の2階が現在清州市役所臨時庁舎になっている事から、文化享受のコア空間化事業：文化製造廠オモシロ団地プロジェクト、東部倉庫イベント、工芸館、ビエンナーレの開催等、また、取り残されない教育と支援、文化芸術の享受・共有の機会拡大として、ライフサイクルを網羅する文化芸術的生涯学習機会の拡大、文化芸術を享受できるようアクセス可能策を具体的に整備し、子どもオーケストラや夢を叶える芸術広場、文化セーフティネット、文化の分かち合いプロジェクトを展開し、文化芸術・技術の融合コンテンツ支援を通じたオリジナリティの拡散を目指していくとの事。

【所見】

本市としては、今後海外との観光・経済・文化交流を深めていかなければならないと考える。

中国・韓国・台湾を初めとする、諸外国は日本側唯一の政令市の本市としては、様々な伝統・文化を初めとする、様々な国際交流を図りながら、アジアの玄関口としての役割を果たさなければならないと考える。

韓国・清州市においては、様々な文化芸術産業の定着と流通に繋がる複合文化拠点化を目指し、文化への興味・関心と幸福度が高い、清州工芸ビエンナーレが開催されており、今回の訪問で観光・経済・文化交流を深める、「きっかけ」を築く事が出来たと考える。

言葉や考え方、文化の違い、様々な弊害や障害があっても、相手の伝統・文化に触れて学ぶことで、「強い絆」を育むことができる事を肌身で感じる事が出来た。今後もこうした、様々な弊害や障害を乗り越えて文化交流を深めながら、観光・経済への国際交流へと繋げていく、日本側唯一の政令市を目指すべきと考える。



(写真) ビョン代表理事による概要説明



(写真) 懇談の様子

○在来市場「ユッコリ総合市場」

【訪問先】 清州ユッコリ総合市場

【面会者】 イ・ビョンス 清州市文化産業振興財団文化都市本部長

【概要】

清州ユッコリ総合市場は、清州市を代表する市場で、農家が自ら栽培した農産物や様々な商品が並ぶ市場である。「ユッコリ」とは日本語で「6つの通り」という意味である。六方向へ道路が伸びる六叉路の目の前に市場が位置することから、その名がついた。夜明け市場（別名・トッケビ=お化け=市場）も開かれ、農家の人々が自ら育てた農産物が朝市で並ぶ。この市場は、朝鮮時代に無心川（ムシムチョン）の堤防沿いに清州場（チョンジュジャン）を開いたのが始まりで、半世紀以上の歴史を誇る。

清州ユッコリ総合市場は、およそ10万平方メートルの敷地におよそ1,600の店舗が軒を連ね、市場に働いている人だけでも約4,000人にもなる規模を誇る。年間売上高は3,000億ウォンを超えると言われている。

近年では日本の商店街を参考にし、アーケードや駐車場を設置、韓国の市場の中でも優れた市場として注目され、他の市場の模範的存在の市場となっている。

【所見】

清州ユッコリ総合市場は、規模が大きく韓国最大級の伝統市場だけあって、その規模は圧巻である。市場内には、さまざまな種類のお店が軒を連ねており、品揃えが豊富である。衣類や雑貨、食料品など、さまざまな商品が揃っている。新鮮な食材や、韓国ならではの伝統工芸品などもある。見ているだけでも楽しめる。そして多くの人で賑わっており、活気がある。店主と客のやり取りや、買い物客の声など、市場ならではの活気を感じられる。

清州駅から徒歩10分ほどの場所に位置しており、清州高速道路の「清州IC」から国道21号線を北上してすぐでアクセスも良い。韓国ならではの雰囲気味わえる魅力あふれる市場であった。



(写真) イ本部長による説明



(写真) 市場内の様子

○国立現代美術館清州

【視察先】 国立現代美術館 清州

【概要】

かつてのたばこ工場の建物を増改築して、2018年に文化展示館空間として生まれ変わった。5階建てで1階と3階の一部は開放型収蔵庫となっており、収蔵作品を観ることが出来る。2階と3階の一部も収蔵庫で来館者は窓から所蔵品が収蔵されている様子の鑑賞が可能。4階の特別収蔵庫は、同美術館が、1971年から収集して来た約1,600点のコレクションが保管されている。これは曜日限定で研究者や美術関係者に開放されている。

作品を保管する収蔵庫が美術館を兼ねていて、国立現代美術館清州に行けば、同美術館で保管・管理する様々な美術作品を鑑賞することが出来る。

【所見】

1946年から2004年までたばこ製造工場として使われ、2021年に複合文化施設へと生まれ変わったこの場所の一角に鎮座する国立現代美術館清州、2015年、本市と共に東アジア文化都市に決定し、清州工芸ビエンナーレを開催するなど、一貫して文化の国際発信を続けてきた清州市にふさわしい美術館である。単に有名美術家の作品を鑑賞するだけにとどまらず、国立現代美術館清州が、所蔵作品を保管・管理する様子を観察できるということや、その機会を首都ソウルではなく、地方都市の清州で提供するという点は特別な存在と言えるのではないだろうか（作品の収蔵と保存に特化した収蔵型美術館）。

また、国立現代美術館清州での様々な美術作品との出会いは一般的な展示とは別の種類の期待感や特別感、或いは親密感を抱かせるものがあったように思う。どの国でも、美術展は主に首都圏において開催されることが多く、地方で質の高い美術展に接するのは容易なことではない中で、清州市には地方都市にも美術（或いは文化）との素晴らしい出会いの場があることを示していたように思う。

美術館や博物館に展示されている作品は、その施設が所蔵しているコレクションのほん

の一部に過ぎないわけで、収蔵庫にねむっている多くの作品に光を当てようと収蔵庫そのものを公開する、いわゆる「見せる収蔵庫」の取り組みが各地で進んでいるが、本市にあっても一考してもよいのではないだろうか。

○清州工芸ビエンナーレ閉幕式

【訪問先】 清州工芸ビエンナーレ（文化製造廠）

【面会者】 李範錫（イ・ボムソク）清州市長

卞光燮（ピョン・グァンソプ）清州市文化産業振興財団代表理事

【概要】

地元の若者たちによる韓国らしいK-POPでのダンスではじまり、45日間と長きにわたる工芸展であり多くの人の来場を示す映像、多くの関係スタッフの力をもって大規模な工芸展を開催したふりかえり、第1回目からの記録の映像。優秀な工芸作家の表彰、スタッフに対する感謝の形、清州市長、来賓の紹介、地元都市出身の歌手のパフォーマンス等終始にわたり、お祭りの様なフィナーレ。東アジア文化都市の3都市の今後の更なる交流を願う、清州市をあげての盛大な閉幕式である。

【所見】

「物事の地図」をテーマに45日間、57カ国の作品、世界中から集まった作品のすばらしさに圧倒される。その中において日本人の工芸作家の出品数、受賞、先回の金賞受賞者の日本人作家作品への敬意のあらわれも、素晴らしいものがあつた。清州市長の言葉に、57か国からの出品の作家への労い、関係スタッフ、来賓、他都市の人、市民が一体となり作りあげて行くことあり、今後も市をあげ取り組む姿勢が感じられる。文化も人も都市も人のつながりで作っていくものだとして再確認できる視察であつた。工芸という文化を通して本市のイベントも、他都市の方々に見て参加し体験出来る場を考えていくことが必要である。



（写真）来賓紹介に応える皆川議長



（写真）閉幕式ステージの様子

◎令和5年10月16日（月曜）

移動（清州市～仁川国際空港～成田空港～東京駅～新潟駅）

《総括》

日韓関係の悪化、その後のコロナ禍を乗り越えて、下火になっていた東文化アジア都市交流事業が新潟市議団代表団の訪問という形で再び動き出したことを大変嬉しく感じた。清州市、青島市、そして新潟市の3市が集い、顔と顔を合わせて互いの理解を促進する事業は大きな目で見れば東アジアの平和につながるのではないだろうか。

滞在中に閉幕を迎えた清州国際工芸ビエンナーレは57の国と地域から3,000点に及ぶ作品が世界各国から集まった。日本の作家も多く出展し、工芸を通じた国際交流の場として華やかに開催されていた。

韓中日国際フォーラムでは、工芸、箸文化、踊りなど3カ国に共通するテーマで取り組み事例の発表、ディスカッションが行われた。中国からの参加者からは常設の交流チームがあると良いのではないかと、といった前向きな提案も上がった。

清州市議会への訪問では、議長、副議長から対応していただいた。米や酒といった両市に共通する特産の話題などで和やかに話が進んだ。皆川団長から新潟市も訪問してもらいたいといった話が出ると、清州市も前向きに検討すると応じていただいた。

また、清州市内を回っていて高層マンションをはじめとした都市開発の勢いには驚かされた。若者も高齢者も街に出ている印象だった。一方で、ビエンナーレやフォーラムの会場となった文化製造廠と東部倉庫はかつて国営のタバコ工場と倉庫だったものを、壊さず、リノベーションして更なる賑わいと市民の愛着を育む施設へと生まれ変わらせたことが特に印象的だった。

清州市文化産業振興財団のビョン代表理事は、「歴史的な建築、空間が失われると、街から人もいなくなってしまう。新潟市においても新潟ならではの建築、空間を活かしていくと良いのではないかと話していた。

新潟市においては古町地区を中心に料亭や花街といった歴史的な街並みが残る。また、海や川、潟といった水辺空間も市民の暮らしと生業に深く関わってきた。本市のまちづくりにおいても清州市の再開発の手法に倣い、本市特有の歴史、空間を活かしていくことは特に有効ではないかと感じた。

今回の訪問を通じて、現地訪問による交流、理解促進は3カ国の平和と発展に大きく寄与するものだと感じた。今後も議会同士の交流や青年交流、文化イベント交流が促進されるよう取り組んでいきたい。

結びに今回の訪問を受け入れていただいた清州市の関係者の皆様、事前準備を担っていただいた新潟市議会事務局に御礼申し上げ、報告とする。